

# 配偶者と死別した独居高齢者の人間関係

主席研究員 小谷 みどり

## <配偶者と死別した独居高齢者に着目する必要性>

2000年以降、わが国では死亡年齢の高齢化が顕著だ。厚生労働省『人口動態統計』によれば、2015年に亡くなった人のうち、80歳を超えていた人の割合は男性で50.4%、女性で73.0%だった。しかし2000年では、男性で33.4%、女性でも56.3%にとどまっていたので、この15年間で長生きする人が急増していることが分かる。2015年には、亡くなった女性の36.0%が90歳を超えていた。

その結果、配偶者との死別を取り巻く環境に大きな変化がみられる。第一に、男性の長寿化により、夫と死別する女性の年齢が上がっていること、第二に、男性にとって妻に先立たれるリスクがあがっていることである。今後、配偶者との死別で独居化する高齢者が急増すると見込まれるなか、配偶者と死別し、ひとり暮らしをしている高齢者の生活実態を把握することは重要であろう。

そこで本稿では、当研究所で以下の要領で実施した調査の結果をもとに、配偶者と死別し、ひとり暮らしをしている60歳代、70歳代の男女が、社会とどうつながっているかという点に着目したい。

図表1 アンケート調査の概要

調査名	高齢者の生活に関する調査
サンプル	配偶者と死別し、ひとり暮らしをしている60～79歳までの男女1,000人 (男性500人、女性500人)
調査方法	インターネット調査 (株式会社クロス・マーケティングのモニター)
調査時期	2016年10月

## <近所づきあい>

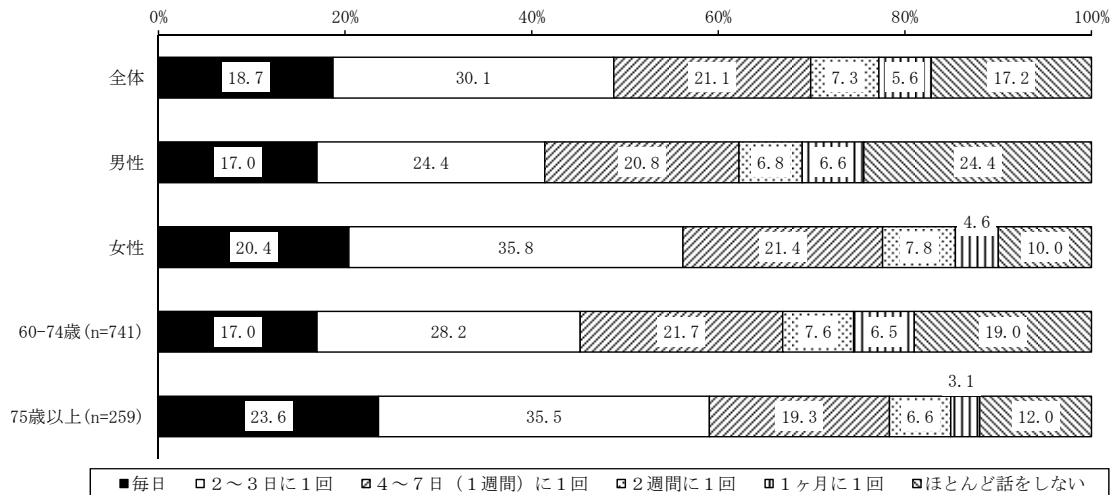
ふだん、近所の人とあいさつ程度の会話や世間話をどの程度するかをたずねたところ、「毎日」と回答した人は、男性で17.0%、女性で20.4%と、女性が若干多いものの、近所の人と毎日会話を交わす人は男女ともに少ない(図表2)。しかし「2～3日に1回」をあわせると、女性では56.2%と過半数の人が近所の人と日常的に会話をしているが、男性では41.4%しかいなかった。

さらに「ほとんど話をしない」人の割合をみると、女性では10.0%にとどまるのに対し、男性では24.4%もおり、男性の4人に1人は、近所の人とあいさつをする機会

がないことが明らかになった。

また年齢層別で見ると、75歳以上で会話頻度が多く、「毎日」「2～3日に1回」をあわせると、59.1%だったのに対し、60～74歳では45.2%と半数に満たなかった。

図表2 近所の人とあいさつ程度の会話や世間話をする頻度(性別、年齢層別)

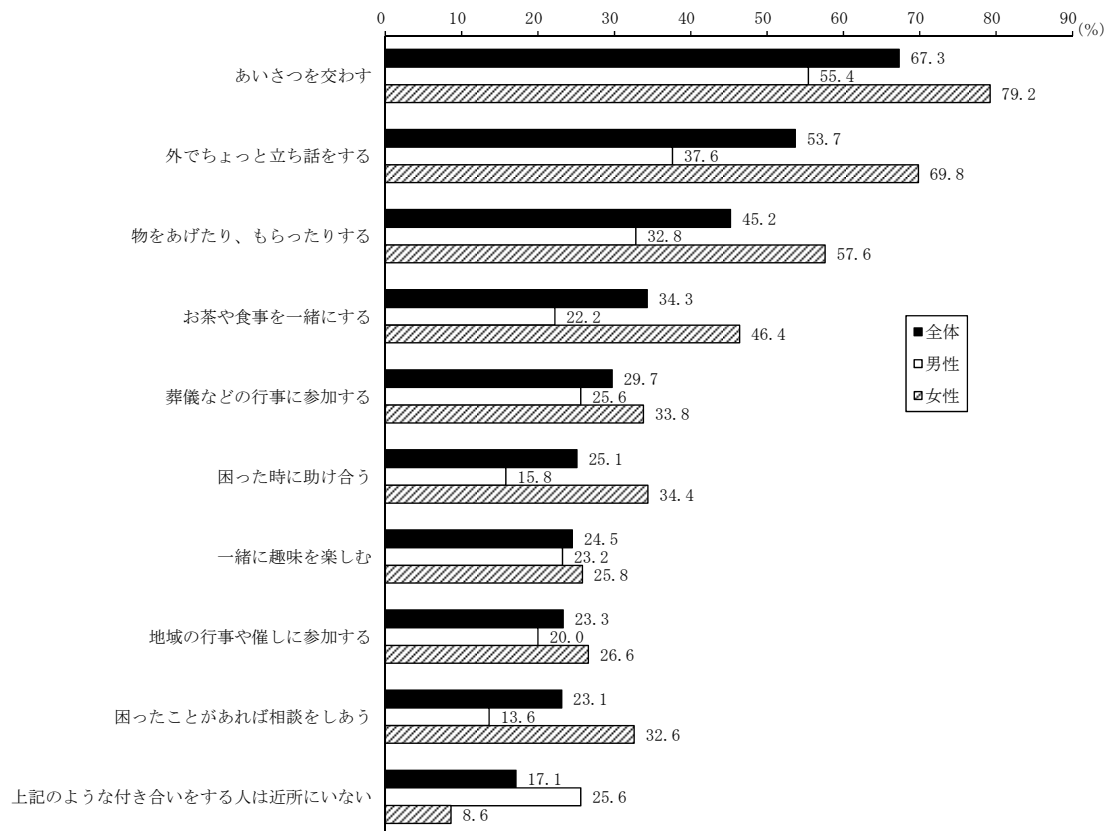


そこで、近所の人との関係をたずねたところ、男女でつきあい方に大きな違いがあることが分かった(図表3)。男性で回答率がかろうじて半数を超えたのは「あいさつを交わす」という項目のみで、「外でちょっと立ち話をする」人は37.6%しかいなかった。一方、女性では「あいさつを交わす」人は79.2%もおり、「外でちょっと立ち話をする」人も69.8%と多い。また「物をあげたり、もらったりする」人は、女性では57.6%いるが、男性では32.8%と、やはり男女で回答率は25ポイント近くの大きな差があった。

また近所の人と「困った時に助け合う」「困ったことがあれば相談をしあう」人は、女性ではそれぞれ3割以上いたが、男性では1割強しかいなかった。以上のことから、全体的に、男性の近所付き合いはあいさつ程度にとどまり、それ以上の日常的な交流は希薄であることがうかがえる。

近所の人かどうかに関わらず、調査対象者の女性は同性の友人関係のなかで生きがいを見出せる傾向があるのに対し、男性では交流する人が少ないことを、筆者はすでに指摘している(小谷2017)。しかし男性の場合は、友人関係以前に、近所の人との付き合いもほとんどないという実態が明らかになった。

図表3 近所の人とどんなつきあいをしているか(全体、性別)〈複数回答〉



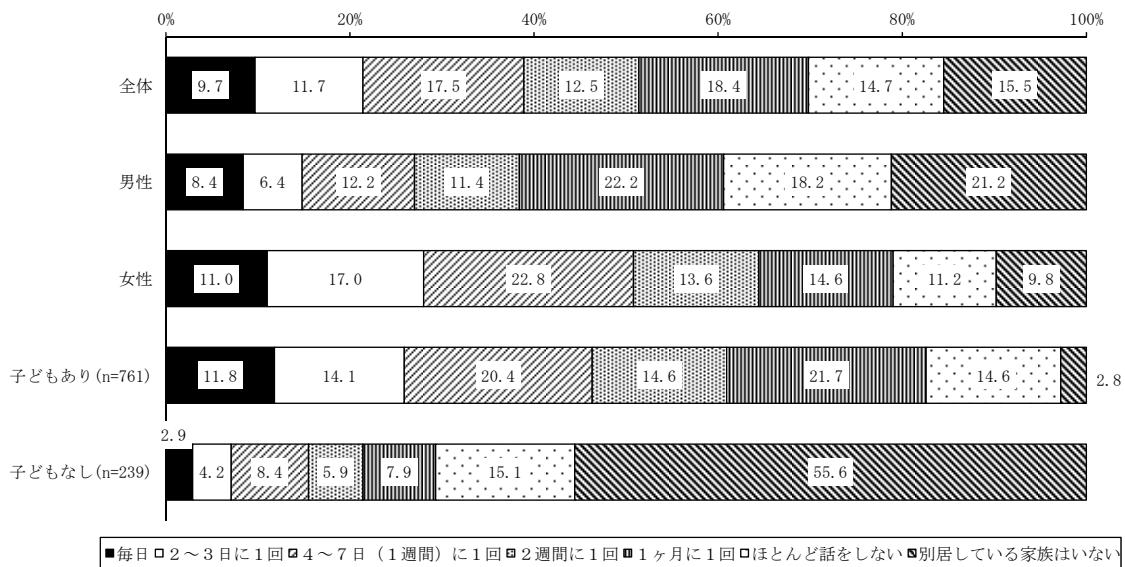
### 〈別居する家族との交流〉

それでは、別居する家族との会話はどのくらいの頻度であるのだろうか。本調査では電話も含んだ会話についてたずねたところ、「毎日」と回答した人は9.7%しかおらず、「2～3日に1回」(11.7%)、「4～7日(1週間)に1回」(17.5%)を加えても、1週間に1回以上会話している人は38.9%にとどまった(図表4)。

性別で見ると、女性では「毎日」(11.0%)、「2～3日に1回」(17.0%)、「4～7日(1週間)に1回」(22.8%)を合わせると、過半数の50.8%が1週間に1回以上、別居する家族と会話しているのに対し、男性では27.0%しかいない。さらに「1カ月に1回」(22.2%)、「ほとんど話をしない」(18.2%)を合わせると、男性では40.4%が、別居する家族とふだん、ほとんど会話をしていないことが分かる。

また子どもの有無別で見ると、会話頻度は子どもがいる人で多く、子どもがいない人では、そもそも「別居している家族はいない」という回答が55.6%と過半数を占めた。とはいえ、子どもがいる人であっても、1週間に1回以上会話している人は46.3%と半数に満たない。

図表4 別居する家族との会話頻度(全体、性別、子どもの有無別)



ちなみに、配偶者と死別した人に限らず、日本の高齢者は、別居している子どもとの会話頻度は総じて低い傾向にある。

内閣府が2015年に実施した「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」では、別居している子どもとの接触頻度（会ったり、電話などで連絡をとったりする頻度）を問う質問で、「ほとんど毎日」と回答した高齢者の割合は、アメリカで42.9%と最も高く、次いでスウェーデン（30.0%）、ドイツ（24.8%）、日本（20.3%）の順となっている。これに「週に1回以上」を加えると、アメリカ（78.6%）、スウェーデン（78.1%）、ドイツ（62.5%）、日本（51.2%）で、日本では、別居する子どもとの会話頻度がこれらの国々よりも少ない（図表省略）。

### <頼れる人がいるか>

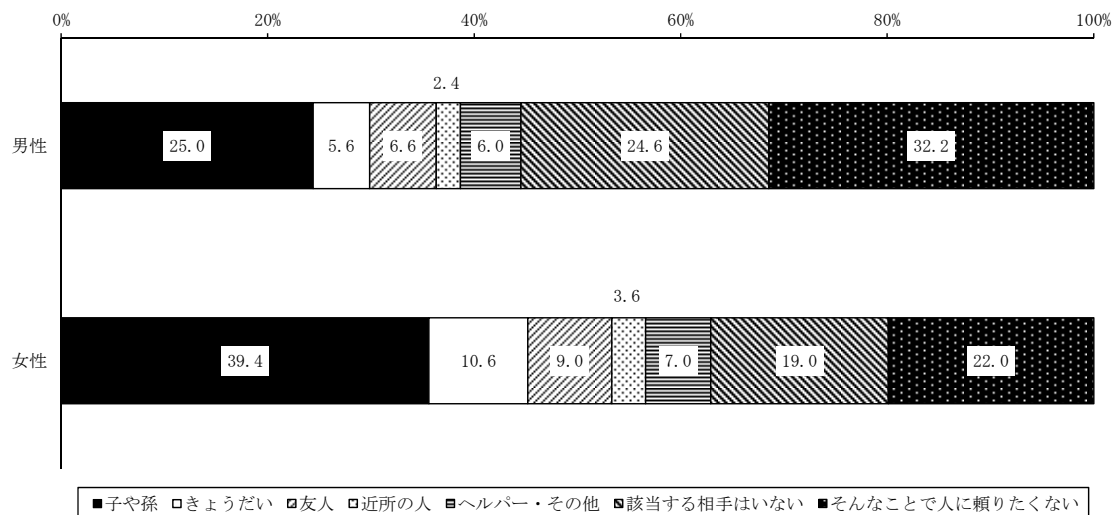
配偶者と死別したひとり暮らしの男性高齢者は、友人、近所の人、別居する家族のいずれとも交流頻度が低い傾向があったが、このような状況で、万が一、困ったことに遭遇したときに頼れる人がいるのだろうか。

本調査では、まず「病気で何日か寝込んだ時に看病や世話を頼みたい相手」についてたずねたところ、女性では「子や孫」を挙げた人が39.4%と最も多かったが、男性で最も回答率が高かったのは「そんなことで人に頼りたくない」と回答した人で、32.2%もいた（図表5）。さらに「該当する相手はいない」と回答した人は、男性では24.6%おり、女性の19.0%より多い。

女性は、「子や孫」（39.4%）、「きょうだい」（10.6%）を合わせると、身内を頼る人が半数いるのに対し、男性では30.6%にとどまり、何日も寝込むほどの状況になって

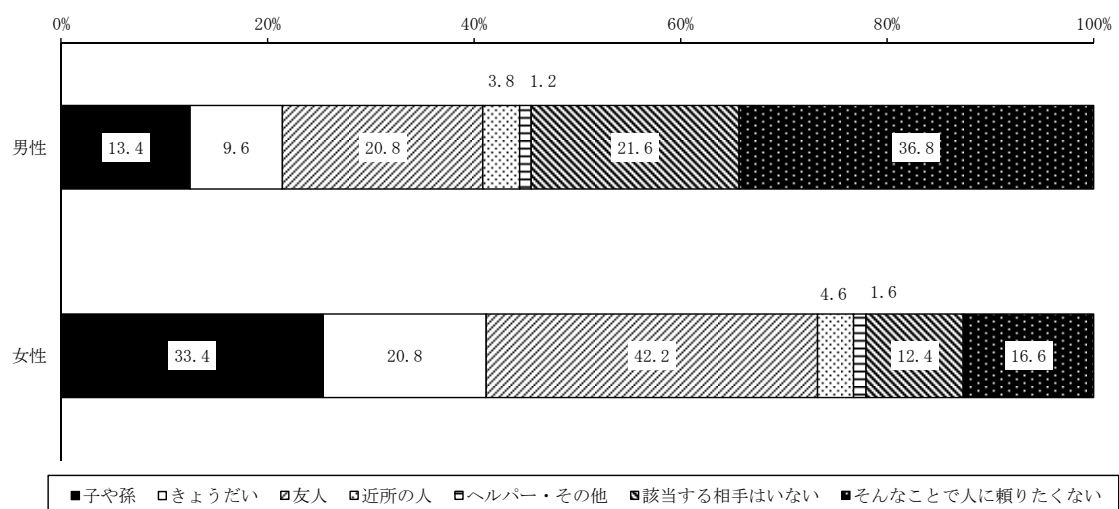
も、頼る相手がいないか、誰にも頼りたくないと考えている人が過半数もいることが分かった。

図表5 病気で何日か寝込んだ時に看病や世話を頼みたい相手(性別)



さらに「心配ごとや悩みごとを相談したい相手」をたずねたところ、女性では「友人」が42.2%もいたのに対し、男性では20.8%しかおらず、「子や孫」を挙げる人も男性では13.4%しかいなかった(図表6)。女性では「そんなことで人に頼りたくない」と回答した人は16.6%にとどまったが、男性では36.8%もいるうえ、「該当する相手はいない」男性も21.6%いた。つまり、半数以上の男性は、心配ごとや悩みごとを相談したい相手がそもそもいないことになる。

図表6 心配ごとや悩みごとを相談したい相手(性別)



できる限り誰にも頼らず、自立していたいという気持ちは理解できるが、ひとり暮らし男性高齢者が、何日も寝込むような状態になったり、心配ごとや相談ごとがあったりした場合に、頼れる人がいないと回答した人が過半数もいるという現状を、私たちはどのように受け止めればよいのだろうか。本人が「そんなことで人に頼りたくない」と回答しているのだから、放置しておけばよいという考えもあるだろうが、果たしてそれでいいのだろうか。

現に、どんなことが不安かをたずねた質問では、不安を感じる人が過半数を占める項目は、女性では「家の中で倒れたり、急病になったりしても誰にも気付かれないこと」(59.2%) だけだったが、男性では「家の中で倒れたり、急病になったりしても誰にも気付かれないこと」(67.0%)、「将来、寝たきりや体が不自由になっても、介護してくれる人が身近にいないこと」(59.6%)、「孤独死するかもしれないこと」(57.6%)と、老、病、死にひとりで対処することへの不安が強かった(小谷2017)。

しかも「困ったときに頼れる人が身近にいないこと」(男性43.4%、女性32.2%)、「話し相手が身近にいないこと」(男性27.4%、女性15.2%)では、不安を感じる男性が女性より10ポイント以上も多かった。将来への不安だけでなく、話し相手や頼れる人がいないといった孤立への不安を抱える男性は少なくないことが明らかになっている。

「そんなことで人に頼りたくない」と思っている反面、頼れる人や話し相手がおらず、寝たきりになっても誰にも気づかれないことを不安に思っている男性はとて多いのである。また、同居するかは別にして特定のパートナーを求める人は、男性で57.8%もいたが、女性では21.0%しかおらず、男女で意識に大きな差があったことも既報した。

以上のことから、妻と死別し、ひとり暮らしをしている男性の不安を軽減するためには、どのようにして他者と関係性を築けるかが大きな鍵となる。友人もおらず、近所づきあいも希薄で、別居する家族とも、困ったときに頼れるような関係ではないといった男性高齢者にとって、どんなきっかけがあれば他者と交流できるようになるのだろうか。ひとり暮らしの男性高齢者の孤立防止策を社会全体で真剣に考える必要がある。

#### 【参考文献】

・小谷みどり, 2017, 「配偶者と死別したひとり暮らし高齢者の幸福感」『Life Design Report』(Spring 2017. 4).

(研究開発室 こたに みどり)